

主論文要旨

学位申請者 澤田和範

題目 ヒュームの懐疑主義的自然主義 ——『人間本性論』における方法・実践・帰結——

要旨

本論は、「自然主義」解釈と「懐疑主義」解釈の対立というヒューム哲学研究の中心問題を、主著『人間本性論』の綿密な読解によって発展的に解消することを目標とするものである。その結論をまず端的に述べるならば、ヒュームという哲学者は、これまでの解釈者たちが考えてきた以上に、より優れて自然主義者であると同時に、きわめて徹底した懐疑主義者である。

研究者の間ではもはや周知のことだと思われるが、一世紀以上に渡って継続してきたこの解釈上の論争を簡単に説明しておこう。そもそもヒュームは伝統的に「懐疑主義者」だと見なされてきた。それは、ほぼ同時代のトマス・リードからカント、19世紀末にヒュームの著作集を編纂した T. H. グリーン、20 世紀のバートンランド・ラッセルに至るまでそうである。ラッセルの『西洋哲学史』（1946 年）によれば、「彼はロックとバークリの経験哲学をその論理的結論まで発展させ、それを自己矛盾しないものにすることによって、信じがたいものにした」。こうした「懐疑主義」解釈によれば、ヒュームは非常に破壊的な「懐疑主義者」にほかならない。しかし、ラッセルのこの言葉が出るより以前、すでにケンプ・スミスが、まず「ヒュームの自然主義」という記念碑的論文（1905 年）で、そして、『デイヴィッド・ヒュームの哲学』という大著（1941 年）によって、たんに破壊的ではない独自の積極的な見解を持った哲学者として、まったく新しい魅力的なヒューム像を提示していた。ヒュームが懐疑論を提示してみせた意図は、むしろ、理性的懐疑によっては破壊されない「自然的信念（natural belief）」の存在を明らかにすることにある。自然的信念とは、我々が実践において前提とせざるを得ないような諸信念である。それゆえ、ケンプ・スミスによれば、ヒュームとは理論理性に対する我々の実践の優位性という人間本性の事実を明らかにしようとした「自然主義者」にほかならない。

どちらが本当のヒュームなのだろうか。「懷疑主義」解釈の擁護者たちは、「自然主義」解釈の説明はヒュームの懷疑論を無害なものとするには不十分だと反論してきた。それに対して、「自然主義」解釈の擁護者たちは、なぜヒュームが提示する懷疑論は本当の懷疑論ではないのか、あるいは、どのようにそれらの懷疑論がヒューム自身によって解消されるのかを説明しようとしてきた。ケンプ・スミスが20世紀の初頭にその引き金を引いて勃発した論争は、それ以来一世紀以上に渡って、ヒューム解釈においては避けては通れない難題となったのである。

ヒュームの懷疑主義と自然主義をめぐる論争がこうして絶えることなく継続してきた最大の理由は、『人間本性論』のテキストがどちらの解釈も支持するように見えることだろう。しかし、ヒュームは自己矛盾している——セルビー・ビッジがそう評したように——というわけではない。もしそのように見えてしまうとすれば、それはヒュームの論述がおもに哲学探究という行為の記述であることを十分に踏まえていないからである。つまり、この論争は、ヒュームの議論の文脈を丁寧に解きほぐしていけば、決着をつけることが可能なのである。

本論はまず、第1章から第3章までを第I部とし、自然主義という観点からヒュームの議論を分析することに当てる。たしかに、ヒュームは「懷疑主義」という言葉は用いたが、「自然主義」という言葉は自らは用いていない。しかし、ヒュームを自然主義者と呼び得る理由は、従来の「自然主義」解釈の擁護者が考えている以上に存在するのである。本論では、いわゆる「ヒュームの自然主義」を、私が「方法論的自然主義」と「人間本性主義」と呼ぶものに区別する。「方法論的自然主義」とは、『人間本性論』に「実験的推理法を精神の諸主題に導入する試み」という副題が付けられていることによって示唆されている考えのことであり、人間精神の働きを因果関係によって把握できる限りにおいて十全に解明しようという方法論のことである。もう一方の「人間本性主義」とは、そのように探究される対象が人間本性であるという主張である。

今日の我々から見てまず興味深いのは、前者の「方法論的自然主義」であろう。自らの実験的探究の方法を基礎づけるために、ヒュームは「必然的結合」の觀念の起源を特定することによって、ア・プリオリな因果推論を排斥する。これが有名な因果論である（第1章）。また、ヒュームは我々の因果推論の「一般規則」をその自然的起源から説明するという紛れもない自然主義的アイデアを持っている（第2章）。18世紀ブリテンのニュートン主義的な実験哲学の隆盛に強く影響を受けたヒュームは、そうして確立された「一般規則」を携えて、第二巻の情念論では「実験的推理法」の実践に本格的に乗り出す（第3章）。こうしたことから明らかなように、ヒュームは人間本性の諸原理を解明する「人間本性主義」によって、自らの実験的推理法を擁護している。ここにおいて、探究方法の確立自体が人間本性についての探究に基づいているという循環を、ヒュームはしっかりと意識している。これがヒュームの自然主義の核心であると言うべきであろう。以上で述べてきたようなヒュームの自然主義の内実を具体的に描き出すこと、それが本論の第I部の主題である。

しかし、ヒュームが自然主義者であることは、ヒュームが懐疑主義者でないことを含意するわけではない。そのことを論じるのが本論第二部の主題である。第4章では、「理性に関する懐疑論」と「感覚能力に関する懐疑論」という二つの議論を、「方法論的自然主義」と「人間本性主義」の観点からそれぞれ論じる。それによって、ヒュームの自然主義と懐疑主義が必ずしも正面から対立したものではないことを示す。しかし、自然主義と懐疑主義は究極的には矛盾するのではないかという疑念は次章に残される。

第5章では、近年の主流派である「自然主義」解釈は、ヒュームが懐疑主義者ではないと主張するにあたって、ヒュームの懐疑主義の性格をその根底から誤解していると論じる。この誤解が一世紀以上に渡って継続してきたのは、「自然主義」解釈が、ヒュームのさまざまな懐疑論を個別に検討することはあっても、その全体像を「統一的懐疑論」として理解する視点を欠いていたことによると考えられる。それは何よりも、ヒュームの懐疑論のピュロシ主義的性格を十分な仕方で理解することが難しかったからであろう。しかし、懐疑主義者ヒュームは、それでもなお自然主義者である。ヒュームは「真の懐疑主義者」の立場に到達することによって、自然主義的な哲学探究を再開することができるのである。

要するに、ヒュームは懐疑主義者か自然主義者かという二者択一を迫るような、従来の諸解釈の問題設定そのものが、究極的には間違っているのである。すなわち、冒頭で述べたように、ヒューム哲学は、従来の解釈者たちが考えているよりも、より優れて自然主義的であり、しかも、より徹底して懐疑主義的である。これはたしかに逆説的な主張である。とりわけ、次のような疑問が起ころう。ヒュームは本当に、このような意味で懐疑主義者であったり、自然主義者であったりするものなのか。そして、もしそうだとすると、自然主義者としてのヒュームと、それに相容れないように見える懐疑主義者としてのヒュームとは、具体的にはどのようにして両立的な関係を実現しているのか――。

本論の各章は、それゆえ、こうした疑問に正面から答えようとしたものである。以下に改めてそれぞれの概要を記す。

第1章 「必然的結合」と因果推論

本章では、ヒュームの哲学探究の前提となる理論的枠組みを説明すると同時に、彼の探究の基礎となる因果論の内容を明らかにすることを目的とする。とくに問題となるのは因果推論の基礎と言われる「必然的結合」についての議論の解釈であるが、私は「必然的結合」の観念は、逆説的にも、原因と結果のあいだの必然的結合についての内容を含まないという「非表象説」解釈を擁護する。また、ヒュームの有名な「原因の二つの定義」を二つの推論方法を記述していると解釈し、以降の議論のために反省的な因果推論の重要性に注目する。

第2章 「一般規則」の発生論的解釈

本章では、ヒュームの因果推論の具体的な規則として注目を集める「一般規則」について、

発生論の観点からまったく新しい独自の解釈を与える。一般規則についてヒュームが考えていたのは、じつは従来の諸解釈が提案してきたような認識的正当化の問題ではなく、その規範性の起源に関する自然主義的な説明である。ヒュームが一般規則を正当化する超越的な基準の存在を否定し、きわめて現代的と言え得る自然主義的な発想を展開していることを明らかにする。

第3章 情念論における「実験的推理法」

ヒュームの掲げる「実験的推理法」は実際にはまったく実質がないとしばしば批判されてきた。本章では、ヒュームが実際に行っている「実験」のパラダイム・ケースとして、第二巻の一節(T 2.2.2)を取り上げ、その当時影響力を持ったニュートンの『光学』における「分析と総合の方法」と比較することを通じて、こうした批判を再批判する。私はヒュームの方法を仮説演繹法的一种と特徴づけることになるが、その眼目は「実験的推理法」における仮説と反証の地位を適切に理解することにある。

第4章 懐疑と自然

本章では、ヒュームの提出したいくつかの懐疑論から、よく知られた「理性に関する懐疑論」と「感覚能力に関する懐疑論」という二つの重要な議論を検討する。この二つはかなり異なった議論に見えるが、「方法論的自然主義」と「人間本性主義」という二つの観点から分析してみれば、パラレルな議論の構造を持っていることが判明する。こうした分析によって、ヒュームの懐疑論においても自然主義が通底していることを論じる。

第5章 ピュロン主義的メタ哲学

ヒュームは、第一巻の「結論」において、これまでの探究を振り返って、哲学探究それ自体への懐疑と、それにもかかわらず哲学探究を再開しようという心情を語る。本章の目標は、これにたんに文献学的ではない理論的な解釈を与えることである。「自然主義」解釈の擁護者たちは、ヒュームの懐疑論のピュロン主義的性格を十分に理解せず、この「哲学探究に関する懐疑論」が、いわばヒュームの「懐疑的」諸議論を総合した「統一的懐疑論」であるということを見逃してきた。一方で、「懐疑主義」解釈の側も、ヒュームの「哲学探究に関する懐疑論」のピュロン主義的性格を誤解し、しばしばヒュームを悲観主義者にしてしまう。こうした誤解を解くことによって、ヒュームの自然主義的哲学とピュロン主義的懐疑主義との関係は一貫したものとして捉え直すことができるのである。